

源流の四季

第8号(2003年1月)

冬



Winter

発行所/多摩川源流研究所 〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村4383
TEL 0428 (87) 7055 FAX 0428 (87) 7057
発行責任者/中村文明
協力/多摩川源流協議会(塩山市・奥多摩町・丹波山村・小菅村)
多摩川源流観察会
印刷/(株)サンニチ印刷
http://www.tamagawagenryu.net
E-mail:genryu@mx.cosmo.ne.jp



小菅川源流・妙見五段の滝(撮影 中村文明)

Contents 目次

- 多摩川源流協議会研修会開催……………2
- 盛大に「水と森と食の祭典」を開催……………3・4
- 巨樹からのメッセージ……………5・6
- 都水源林の経営計画の変遷……………7
- 参加者募集・平成15年度のイベント紹介……………8

多摩川源流協議会が研修会を開催

「多摩川の自然とその魅力」を再認識

塩山市、奥多摩町、丹波山村、小菅村で構成する多摩川源流協議会は、十一月十四日、丹波山村中央公民館で第一回研修会を開催し、自然に対する見方や多様な生態系の大切さや、上下流交流のありかたや動向について学びました。



源流協議会研修会で挨拶する大館奥多摩町長（丹波山村・11月14日）

主催者を代表して多摩川源流協議会副会長の大館奥多摩町長は「源流協議会の初仕事として今日第一回の研修会がもたらした、これから流域の方々の理解を得るよう、この地域をおおいにアピールしたい」と挨拶、続いて地元の守屋武彦村長が「源流協議会の第一回研修会が丹波山で開催されることは大変光栄で歓迎します。水源の森という共通の資源を持っている我々は水や山や森を大切に、後世に繋いでいきたい」と歓迎の挨拶を行いました。

科学的な事実を挙げて消火活動をしなかった理由を述べた。自然の法則を知っているか知らなからいかに全く異なる判断になると、様々な事例を挙げながら、源流には自然の最高の働きがある。自然がやってくれることは自然に任すなど、長く知ること源流の魅力は増す、と訴えました。

多摩川センター副代表の山道省三さんは、いま源流に熱い視線が送られている。山がおかしくなると魚がまずなくなるといった漁民が山に入って木を植え始めていて、洪水の時材木がどんどん流れてくる、森が弱ると山が弱る、「森は海の恋人」との見方が広がっている。源流域でストックされている生活技術、生存のノウハウなど都市住民は求めている。全国に先駆けて上下流交流を一層進めて欲しい、と語りかけました。

世界子ども水フォーラム地域交流 多摩川流域交流会へ105名

10月20日、源流の子供と中・下流の子供が源流体験を通して、交流を深めました。当日は、川崎の水辺の楽校から43名、狛江の水辺の楽校から15名、三鷹のオアシス学校から16名、八王子ランドマークから16名、小菅から15名など流域各地から105名が参加しました。



世界子ども水フォーラム多摩川流域交流会（小菅川源流・10月20日）

謹賀新年

昨年中はなにかとお世話になり

ありがとうございました

今年もどうぞよろしく願い申し上げます

平成十五年元旦



多摩川源流研究所
所長 中村文明
事務局長 佐藤英敏
主任研究員 井村礼恵



盛大に『水と森と食の祭典』を開催

新しい世紀を迎え、水や森についての関心が広がる中、十月十九日に「水と森と食の祭典」が、二十日に「小菅村・第五回大地の恵祭」がそれぞれ盛大に開催されました。

会場に明るい笑顔と明日への確信溢れ

源流と流域が力を合わせ

小菅村中央公民館で開かれた「水と森と食の祭典」は、小菅



「水と森と食の祭典」で挨拶する廣瀬小菅村長（10月19日）

村と源流研究所、(財)水と緑と大地の公社、観光協会、商工会と「水と森と食の祭典実行委員会」(加盟十九団体)が主催して開催されました。源流のイベントを流域の市民や団体と共同で催すのは今回が初めてでしたが、地元や流域の百二十名を超える参加者で会場は埋まりました。当日の基調報告、講演、「水と森と川を語るシンポジウム」と立食交流パーティーはいずれも大変好評で、会場には明るい笑顔と明日への確信が溢れていました。

自然環境が新たな価値

主催者を代表して挨拶に立った廣瀬文夫小菅村長は、今回の実行委員会に流域の十九の関係

団体が参加してこの取り組みの成功に協力、支援を頂いたことに感謝を述べた後、「過疎がすすむなか、源流と流域との交流事業の推進で村の活性化を進めたい。今の時代は水や森など自然環境が新たな価値を持ち始めている。水や森を守る大切さと流域の地域振興を考える交流の場としてこの祭典が成功できまますよう期待します」と挨拶しました。

続いて今年七月三十日に設立された多摩川源流協議会副会長の大館馨與多摩町長から祝辞が述べられました。大館副会長は、塩山市、奥多摩町、丹波山村、小菅村が協調して源流域の自然環境や森林を保全していくと源流協議会を発足させた趣旨と経過を紹介し、流域と源流が一体となって源流の水と森を守っていくと呼びかけました。源流協議会からは、塩山市の日原健次助役も出席し紹介されました。また、参議院議員の岩井國臣先生のメッセージが「多摩川



源流の「うめえもの」に乾杯！(小菅村役場・10月19日)

と語る会」代表の田中喜美子さんから披露されました。

「水源林を造った人々」

続いて大阪経済大学教授の稲葉紀久雄先生が「水源林を造った人々」と題して基調報告しました。稲葉先生は、「確かに東京都の水源林の基礎を築いた方々は、本多静六林学博士や尾崎行雄の名があげられる。これらの高名な人達の功績を否定するものではないが、この水源林の造成と保全の影には、名も知れず、献身的に働き、生涯を水源林に

の様な人々に焦点をあてて水源林の形成史を振り返ると、一人の人物が浮かび上がる。この人は「中川金治」というと、中川金治を取り上げる背景を説明。紙芝居を交えながら、中川金治の人柄や功績を詳しく紹介し、参加者に感銘を与えました。

「巨樹からのメッセージ」

続いて「巨樹の会主宰」の平岡忠夫先生が「巨樹からのメッセージ」と題して講演しました。平岡先生は、「巨樹の素晴らしさに魅せられ、もっぱら巨樹を描くようになった」と前置きして、神奈川県山北にある「帯(ほうき)スギや山形県長井市の「草園のサクラ」などの巨樹にまつわるエピソードを交えながら、全国各地に伝えられている巨樹信仰には人々の巨樹への感謝の念が深く込められていることを明らかにしました。

さらに平岡先生は「巨樹はタフに見えてもデリケートな生理の持ち主で環境の変化に敏感に反応し、衰退することに気づいた。以来、「巨樹は環境のセンサー」と唱え、巨樹を守ろうと活動している」と巨樹や森林を守る全国各地の取り組みを紹介しました。(講演は本号で紹介)

「多摩川を愛する人の大河」に感動

シンポジウムで活発な意見相次ぐ

全国の源流を愛してほしい

シンポジウムは、八王子ランドマーク研究会の石田幸彦さんがコーディネーターを務め、朝日新聞の菅沼栄一郎さんと猿ま



水と森と川を語るシンポジウム (小管村中央公民館・10月19日)

わしの伝承者の村崎修二さんをコメントーターに活発な意見が展開されました。

先陣を切った奈良県川上村の「水と森の源流館」事務局長の坂口泰一さんは、吉野川の源流に八百ヘクタールの水源の森を村で購入し、森と水を育てている活動を詳しく紹介。全国の源流に関心を持ち、全国の源流を愛してほしいと訴えました。

道志村の「道の会」の金子美治さんは、道志にも横浜市の水源林があること、子供の頃川を歩くと魚が足にあたる良い川だったと、いま魚が減り水が濁ってきていると発言。小管村の木下景利さんは、山で間伐、枝打ちが辛い仕事だ。森林組合の組合員や山仕事をしている人達は高齢化している。水源の森を守るため、下流の方々の力を貸してほしいと話しました。

ヤマメ養殖に携わる古菅一芳さんは、酒井崑さんが全国に先駆けてヤマメの養殖に成功した。山に雑木が残っているから水量が維持されている。綺麗で冷たい小管の川は魚の養殖に最適。魚の餌は川の汚染原因の一つだが、水を浄化して川に流している。この努力は永久に続けたいと語りました。

森を守る人工林を守る

都水源林の管理に三十四年かかっていた堀越弘司さんは、川を語るには森を語ることに、森を語るには人工林を語る必要があると語り始め、単一樹種の場合、病害虫が広がりやすいなどの不安定さはあるが、人工林だから崩壊しやすいと言うことはない。いま人工林を開引き広葉

樹を広げている。天然林には手を加えない。川を守るには森を守らなければならないが、森を守るには人工林を守らなければならないと強調しました。

続いて川崎市の本木紀彰さんが水辺の栗校の取り組みを生き生きと紹介。狛江市の小川啓二さんは平成二年以来取り組みきたいかだレースは、お金や時間がかかり人手もいるが、年々輪を広げ小管からも参加していただいていること、いからから流域を取り込んだ郷土芸能フェスティバルに発展している様子を紹介しました。

雨の音は山からの拍手

川崎市の田中喜美子さんは、最初の一滴に感動して川崎の河口から水干まで百三十八。を歩いている。一回目が、四年半で二十七回、八百三十一名が参加した。水干から小屋に戻り昼食を取っているとトタン屋根に大粒の雨が激しく降った。その音が山の音、山からの拍手に聞こえ感動した。二度目の挑戦には、延べ人数で千八百三十六名が参加した。この取り組みを新聞で紹介したら、「多摩川が育んだ

人の大河」と評価された。これからも「多摩川を愛する人の大河」をみんなで築き上げていきたいと発言し、参加者に大きな感動を与えました。

さらに、多摩川の自然を守る会の柴田隆行さん、リバーシッポの会の中川一郎さん、下木文化研究会の酒井彰さんなどが発言しました。

うめえものに舌鼓打つ

「食の祭典」立食交流パーティーは、午後六時から役場の二階で開かれ、遠藤まもる都議会議長が挨拶し、古菅丁小管村議会議長が乾杯の音頭をとったあと、参加者は「源流のうめえもの」に舌鼓を打ち、交流と親睦を深めました。当日は、テーブルにヤマメの塩焼き、きのこ汁、手打ちそば、イワナの刺身、刺身コンニャク、里芋コロッケ、ヤマメの稚魚の唐揚げ、いわな骨酒、いわなのにぎり寿司などが並び雰囲気盛り上げました。飲み物は、流域の酒や葡萄酒が飲み放題で大変好評でした。観光協会と小管の湯の心からのもてなしに参加者は満足の様子でした。

『巨樹からのメッセージ』

十月十九日の「水と森と食の祭典」で行われた平岡忠夫先生の講演「巨樹からのメッセージ」は、参加者に大きな感銘を与えました。ここに講演の内容を紹介いたします。

A 感謝の心が 原点の巨樹信仰

私は、巨樹三千枚を描く。をライイワークとする画家である。第二次大戦の終わった一九四五年から風景画を描いてきたが、七〇年代に入ってから私の心にフィットする風景に出会うのが困難になってきた。スギやヒノキの拡大造林政策の進展で、いたるところの風景が人工林化して、自然の気が薄れてしまったのである。



講演する平岡忠夫先生（10月19日）

村で「精進の大スギ」に出会った。そこには自然の気が溢れていた。一九七八年のことである。その素晴らしさに魅せられ、もっぱら巨樹を描くようになった。

五十号ほどの和紙に描く現場制作は時間もかかり、おのずから知見も増える。

神奈川県山北町にある「菅平」を描いていると、樹の下の方に住む佐藤さんが寄ってきて、「明治のころ、家が焼けたから守ってくれた。昭和には、土砂崩れの時にこの樹が土砂をおさえて、我が家を救ってくれた」と語りかけてきた。

山形県長井市にある「草園のサクラ」では、持ち主の横山秀さんから「昔からこの里では、サクラが咲いたら稲の種を蒔くことになっている。農業層ともいえる存在だ。ゆえに、種蒔きサクラ」とも称されて里人も大事にしている」と教えられた。

高知県土佐町「平石の乳イチョウ」では、村人から「昔は、母乳が出ないと、この樹の乳柱（乳根）を切りとり、砕いてミルク状にして赤ち

やんに与えた」と聞いた。

学術書で、乳柱は樹の貯蔵栄養分の蓄積されたものと読み、巨樹と人の命の古くからのつながりを知った。

知見を重ね、巨樹信仰には人びとの巨樹への感謝の念が深く込められていると悟った。

B 巨樹は 環境のセンサー

巨樹画を三百枚、四百枚と描いていくと事情に通じてくる。巨樹はタフに見えてもデリケートな生理の持ち主で、環境の変化に敏感に反応し、衰退していくことに気づいた。以来、「巨樹は環境のセンサー」と唱え、巨樹を守ろうと活動している。

ドイツ連邦政府は九九二年の酸性雨等にかかわる森林被害の現状報告で「すべての樹種で、老木の被害は成木より二―四倍も大きい」と発表し、巨樹が環境のセンサーであることを裏づけた。

農水省森林総合研究所は、「一本多樹六博士が大正初期に集計した一五〇〇件の巨樹・名木につき、現

況調査をしたところ二九パーセントが生存、五二パーセントが枯死・消失し、不明が九パーセントであった」と巨樹の衰退が著しいことを発表しました。

C 巨樹群生こそ 本来の森林生態

巨樹画を描くという私のニーズから始まった山地での巨樹調査であったが、やがて同好者が集まり、自然発生的に巨樹の会が誕生し、地元の人びとの協力を得ながら現在までに二二七本の巨樹巨木を発見している。

環境省は一九九〇年に初回の巨樹巨木林調査を行ったが、十年後の二〇〇〇年に追跡調査を行った。その成果に巨樹の会の調査が大きなウエートを占めたので紹介する。

巨樹巨木林

フナローアップ調査について、※調査結果のうち巨樹の会によるもの割合
新規調査本数

都道府県二位	一〇、三六七本の 二二〇%
東京都三、七九九本の四五%	
市町村二位	
奥多摩町八九本の二〇%	
市町村一位	
御蔵島村六四九本の 七〇%	
市町村三位	
角館町四四四本の 九九%	

今回確認された国内最大級の巨樹五本のうち四本は巨樹の会により発見あるいは確認されたものである（左記・数字は幹周リ）
赤羽根大師のエフキ（徳島県宇村） 八七〇cm
御蔵島の大シイ（東京都御蔵島村） 一、三七九cm
ブナ日本（秋田県角館町） 八六〇cm
ミスナラ日本（秋田県角館町） 一、三〇〇cm

環境省の発表には示されていないが、このほかに巨樹の会は日本のクマ、日本二のクロベ、日本のシオジ、日本二のヒノキ、日本二のハゼ、日本のオキナワウラジロガシなどを発見・確認し、日本の巨樹・巨木林の素晴らしさを掘り起こした。これらの巨樹・巨木林のうち新規調査本数二位の奥多摩町日原山地と三位の角館町和賀山塊の巨樹・巨木林を構成する主要な樹種について、樹種別に学術上の分布地との照合表を制作し、事例研究とした。

イヌブナは学術上の分布地が岩手県以南の表日本側とあり、和賀山塊の秋田県側には当然のこと。他の樹種についても学術上の分布地とまったく整合していて、秩序だった巨樹の分布は巨樹が異なる存在でないことを主張している。これは、巨樹群生こそ本来の森林生態であることを示しているよう。

D 人びとに守られてきた巨樹の森

日本古来の自然信仰に中国伝来の仏教や神仏思想が結びついたのが修験道。自然崇拜に僧侶が山野を行脚する森林抖擻のなわしりが結びついた修験道により、人びとの巨樹や森林を崇めて大切に思う思いは高まった。大和時代末期のことである。明治政府により修験道は世から消されたが、その痕跡は地名に残っていた。日原山地と和賀山塊についての修験関連の地名を紹介する。

E 奥多摩日原山地

東と西の天目山が長い間私謎であった。中国の天目山を調



講演は参加者に大きな感銘を与えました (10月19日)

日原山地と和賀山塊の地名

日原山地	秋田県側の和賀山塊
東天目山 (ミツドッケ)	貝吹岳
西天目山 (西谷山)	錫杖の森
水松山	権現山
火打岩	書知鳥川
山伏沢	
笠の岩山	
両替場	
流入の峰	
梵天岩	
精進場	
ウトウの頭 (善知鳥の頭)	
御供所	

べて疑問は氷解した。天目山は中国浙江省の西北部と安徽省との境にあり古来、仏教、道教の聖地であった。その山地は東天目山と西天目山に分かれて、山中には滝、泉、池、巖、洞窟などに富み、僧侶の修行が盛んに行われていた。これを模して構成されたのが日原山地の修験のシステム。徳川幕府が江戸鎮護のため造営した東叡山寛永寺であるが、一方、寛永寺は修験三派のうちの本山派の本山でもあった。その直轄の修験の地であったのが日原山地。格の高さを世に示すため、中国天目山にならぬ、修験のシステムが設定されたものと推測している。

F 秋田県和賀山塊

また表中の笠は「生」で、ものが地を貫いて生じる意。金剛界と胎藏界が接するところが両替場。修験道で祈禱に用いる幣束を梵天と呼び、ウトウは善知鳥と書き、殺生を戒める教え。御供所は神へのお供えのものとこのころ、などとなる。

山塊の山麓、角館には佐竹領内のすべての山伏修験者を支配する今宮御津守家があった。領内の山伏修験者は八〇〇人に達したという。山塊の地名に、彼らの修行の姿が浮かんでくる。法螺貝を吹くから命名の貝吹岳、錫杖は修験者の杖、笈は修験者が仏具などを納めて負う箱。地図を開くと、夏瀬温泉付近で和賀岳に向かい南西に行くのが堀内沢、地図上で四キロ行くと朝日沢、さらに二キロでマングノ沢。マングノ沢の一五〇メートルほど手前で南西に分岐するのが笈の沢、辿った先に錫杖の森がある。

私たちは堀内沢下流側で美しいカツラの群生林を調査したことから、上流側の素晴らしい巨樹の森の存在を教えられ、登山家・佐藤隆氏に案内を乞うたが、「流をいくつもこえるなど和賀山塊でもっとも難コース。あな

G “子供の森づくり” “青年の森づくり”

御蔵島(東京都)に通つて五年目、私はこの島の台風による大災害に遭遇した。一九九五年九月のこと。降水量六四八ミリ。風速計は六七・八メートルを示したところでダウン。川田の森は私たちが調査をしたとき巨樹が二・三本もあったのに、がらんどろ。カツオ鳥の死骸が散乱し異臭を放っていた。

調査すると森の崩壊はなんと七〇か所。古老は近くの島はたいた被害がなかったのにこの島だけ酷い目にあつたと嘆いた。これらの見聞から、台風の異常な激しさは、気象のゲリラ化によるのではないかと、すると地球温暖化が始まったのではないかと。それはみんなの責任であると考え、植樹して森を再生しよう」と呼びかけた。六年前から始まった「子供の森づくり」は小中学校生徒、保育園児、

母親に背負われた赤ちゃんも参加する行事になっている。国土緑化推進機構から緑の羽基金の助成を得て、三年前から始まったのが「青年の森づくり」。巨樹の会メンバーと有志の青年達が島に合宿。十一か所の崩壊した急崖地に伐り出した風倒木で筋工を施し、陽樹を植え、やがて島本来の陰樹の照葉樹林を育てようとするもの。すでに八〇〇本の風倒木で施工した筋工箇所の一〇、四〇〇本のオオバヤシバシと、七、四〇〇株のハチジョウウスギを植え、今年には陰樹の照葉樹の苗木七三〇本を植えてきた。

気象のゲリラ化は近年ますます激化し、各地で大災害を起こしている。私の住む日原山地でも昨年九月、襲来した台風一五号が七・二九ミリという観測史上最大の局地的豪雨を降らせ、近くのタル沢が標高差五五〇メートルに及ぶ大規模崩壊を起こした。巨樹の会は、巨樹や巨木の森を大切にすることが、人びとの暮らしを守ることに通じると考え、みんなでやろうと呼びかけながら御蔵島での森づくりを続けていく。(ひらおか ただお 画家/巨樹の会主宰/全国巨樹、巨木林の会副会長)

シリーズ「水源の森」②
都水源林における経営方針の推移



東京大学大学院
農学生命科学研究科
農学特任研究員
泉 桂子

東京市の経営に先立つ東京府の水源林経営は、自然条件の厳しきによる拡大造林の失敗や独立採算方式の破たんがあり十分な成果を上げることができなかった。

東京都の水源林取得以来、東京都水道水源林の経営計画はおむね表1のように推移してきた。東京市の経営開始後も、第一次経営計画（明治四三〜大正一一年）において自然条件の厳しき等から造林面積は計画を下回り、第二次経営計画（大正二〜昭和二年）においては、拡大造林の規模は縮小された。続く第三次経営計画（昭和一三〜一三年）では、経営方針に風致維持の観点が盛り込まれ、天然林の択伐施業に重点が置かれた。戦後の第四次経営計画（昭和二四〜三〇年）においても、

第三次の内容がほぼ踏襲され、「本部水源林は、前述の通り水源かん養と河水の浄化を期することを目的とするものであるが、他面風致保安林としての使命も重視して、その経営を計らねばならない。（中略）本経営の施業方針は天然林に対しては択伐更新により、人工林に対しては植林により各後継樹の撫育保持を画るものであつて、保護林には天然人工の二方法を各場合に応じて採用する」としている。

しかし、第五次経営計画（昭和三一〜四〇年度）になると、多摩川の流量調節を目的とした水源かん養林としての経営を指向しながらも、木材生産が重視された。経営方針は「科学的な基礎の上に立つ理想的な水源林の経営法というものはなお確立されていないといえる。（中略）森林については全体として合理的かつ計画的経営が行われるならば、それが同時に水源かん養の目的を果たすものであるとの前提に立つて、個々の森林ごとにその生産力を最高度利用することを考えるべきではないかと思う。すなわち今後の経営に

〈表1 東京都水道水源林 経営計画の変遷〉

計画区分・年度別区分	経営計画の概要
第1次 明治43〜大正11 (1910〜1922)	経営面積18,750町歩のうち、施業地を15,000町歩とした。採用の10年間で無立木地の5,000町歩に造林し、30年間で15,000町歩の地域をスギ・ヒノキ・カラマツ等を主体に造林することを基本方針とした。
第2次 大正12〜昭和12 (1923〜1937)	経営面積を16,236町歩、施業地は8,107町歩に縮小した。従って、未植栽地の4,347町歩に対しては、毎年72町歩程度を伐採し今後60年間でこれらの山林を人工林に更新することとし、他の施業制限地域に対しては、収穫を予定せず、保護育成を図ることとした。
第3次 昭和13〜昭和23 (1938〜1948)	経営面積20,777haの70%を占める天然林は、水源かん養林として有効な混交多層林のうっそうとした森林に誘導するため、低率の抜き切りを30年周期で繰り返すこととした。また、天然林の人工林化は、小面積に留め、分散させることとした。 戦時中、水源林の経営は、一時経済局に移管された。
第4次 昭和24〜昭和30 (1949〜1955)	昭和21年4月水源林は再び水道局の所管となり、戦時中放置されていた人工林は、保育作業に重点を置き、過伐跡地への植栽を推進した。なお、木材の需要調整上、一部の森林について伐採・収穫し、翌年植栽する方針をとった。
第5次 昭和31〜昭和40 (1956〜1965)	国の林業政策に伴い、経済性の低い広葉樹を経済性の優れた針葉樹に切り替える拡大造林策をとった。
第6次 昭和41〜昭和50 (1966〜1975)	水源かん養機能の発揮と自然保護に配慮しつつ、前期に引き続き拡大造林計画を踏襲した。46年以降は天然林保護の時代的要請を受けて、計画の一部を修正して、天然林伐採を中止するとともに人工林伐採についても漸減させることとした。
第7次 昭和51〜昭和60 (1976〜1985)	前計画の経営方針をほぼ引き継いでいるが、木材の収穫を「副次的なもの」と規定し、それまでの木材収穫に傾斜しがちの姿勢からの転換を図った。また、自然環境保全への配慮をより重視し禁伐扱いの保護地を、全天然林を含む15,400haに拡大指定し、さらに施業地中に長伐期の区域1,500haを新たに設けた。
第8次 昭和61〜平成7 (1986〜1995)	経営方針は前計画を引き継ぎ、公益的機能の発揮をより重視し明確化するため、人工林を、将来天然林に戻す森林と副次的に木材収穫を継続する森林とに区分した。木材収穫を継続する人工林における更新方法も、崩壊防止の観点から、皆伐更新を非皆伐更新に変更し、さらに、広葉樹の導入を図ることで、森林土壌の劣化防止、及び流出防止を図ることとした。 このため、人工林における理想とする森林像を、天然林に近い針広混交の複層林と定めた。

出典：東京都水道局、1996、水道水源林管理計画―第9次―

ついては保安林としての水源かん養林の一面にのみ目を奪われることなく、資源としての森林の価値をより高めることにも力を注がねばならない」としている。第六次経営計画（昭和四一〜五〇年度）においても第五次の方針をほぼ踏襲し、「水道水源林は、健全な森林を育成することによって流量の調節、流水の浄化、土砂流出の防備等水源

かん養機能を十分に発揮させ、合わせて森林の経済性を高め、もって水道事業に寄与することを目的とする」としている。以上のように、第六次までの東京都水道水源林の経営計画においては、程度の差はあるものの木材生産を行いつつながら水源かん養機能も同時に発揮されるという方針で推移してきた。

また、上記の経営計画に基づいては保安林としての水源かん養機能を十分に発揮させ、合わせて森林の経済性を高め、もって水道事業に寄与することを目的とする」としている。以上のように、第六次までの東京都水道水源林の経営計画においては、程度の差はあるものの木材生産を行いつつながら水源かん養機能も同時に発揮されるという方針で推移してきた。

参加者募集！平成15年度イベント紹介

「好評をいただいております一般対象の「大菩薩・探訪の旅」「源流・水干探訪の旅」「源流古道・水干探訪の旅」、そして学校や青少年団体の親子を対象にした「源流体験教室」を十五年度も開催いたします。これらの事業は多摩川源流と流域交流を推進し、多摩川源流域一帯の豊かな水源林や渓谷など手つかずの自然を多くの方に体感していただくことを目的としています。

新緑の「源流・大菩薩探訪の旅」

「源流・大菩薩探訪の旅」は、これまであまり知られていない南大菩薩を歩く旅です。ブナ、ミズナラの巨樹や学術的にも貴重なシオジ林にも出会うことができます。峠からは南アルプス



「源流・水干探訪の旅」(2002年11月3日)

や富士山も絶景です。コースは小菅村の日向沢登山口から登り、大菩薩峠→熊沢山→石丸峠→天狗の頭→牛ノ寝→雄滝上流へと下る7時間ほどの行程です。

◎日時/五月三十一日(土)

六月一日(日)

◎集合/JR奥多摩駅午前10時

◎費用/一万三千元

(宿泊費一泊四食付き・保険代・温泉代・その他)

◎対象/山歩きに自信がある方

◎定員/三十名(先着順)

新緑の「源流・水干探訪の旅」

多摩川は、塩山市の笠取山にある水干から百三十八キロ旅して東京湾に注ぎます。あなたが目で多摩川の最初の一滴を確かめてみませんか。山梨県百名山にも指定されている笠取山の

頂上からみる景色も絶景です。昨年、最初の一滴に会えなかつたあなた、頂上で霧しか見えなかつたあなたのリベンジもお待ちしております。

コースは、歩きやすい整備された登山道で、往復六時間の行程です。

◎日時/六月十四日(土)

十五日(日)

◎集合/JR奥多摩駅午前10時

◎費用/一万三千元

(宿泊費一泊四食付き・保険代・温泉代・その他)

◎対象/山歩きに自信がある方

◎定員/三十名(先着順)

「源流古道・水干探訪の旅」

一昨年、多摩川源流の山々を一週間かけてリレーで廻ったこの企画は、大好評のため、昨年



自分の力で源流を歩く(源流体験教室)

から三年かけてAコース、Bコース、Cコースと廻っています。今年は、Bコース。柳沢峠→笠取山→将監峠です。

◎日時/八月八日(金)～十日(日)

◎集合/JR奥多摩駅午後三時

◎費用/一万八千元(宿泊費二泊六食付き・保険代・その他)

◎対象/山歩きに自信がある方

◎定員/二十五名(総統参加者で定員はほぼ満ちています)

◎新規募集は若干名のみ。先着順。

※秋には、十月末に「紅葉の源流・水干の旅」、十一月初めに「紅葉の源流・大菩薩探訪の旅」も予定しています。

「源流体験教室」

研究所設立以来、大好評を

いただいております親子対象「源流体験教室」も、平成十五年度の受付を始めております。渓谷の岩盤の雄大さ、そして水のきれいさと冷たさ。淵に飛び込んだり、潜ったり、ヤマメなどの生物観察をしたりと、ありのままの源流を子ども達に体感してほしいと考えています。

昨年度は流域10市区町村の団体、例えば、川崎水辺の楽校、多摩市立諏訪小学校、山梨県立るろろ学校、瑞穂町教育委員会、調布市児童館、日野市ふるさと博物館など多くの団体が体験されています。

また、ゆつたりと多くの源流を体験できるよう、宿泊型をお勧めしています。キャンプ場をはじめ、各種宿泊施設もありますので、まずはぜひ源流に下見にいらしてください。お待ちしております。

◎期間/六月から九月まで
◎体験場所/多摩川源流・小菅川溪谷内源流体験ゾーン

◎お問い合わせ・お申し込みは

小菅村役場(総務課・佐藤)

☎0428-1877-0111

多摩川源流研究所

☎0428-1877-0555

小菅村観光協会(亀井)

☎0428-1877-0741